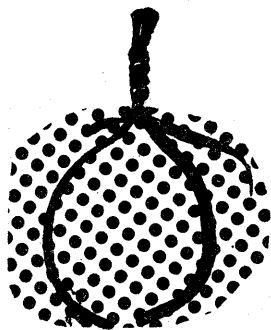


エリクソンと幼児教育 (12)



仁科 弥生

自我同一性の障害について論じた「自我発達と歴史変動」(一九四六年)の中で、エリクソンは、強くて正常な自我同一性の形成を可能にする要因はどのようなものであろうかという問いに対して、強い自我をつくりあげてゆく要因が、そのような同一性の形成に寄与するであろうと答えている。そして、彼はフロイトがすでに一九一四年に「ナルチシズム入門」Ⅲの中で問題にした人間の自尊心の源泉としての幼児的自己愛に言及しながら、自尊心の源泉として個人の自我同一性の発達に寄与する重要な幼児生活の条件について、次のように述べている。すなわち、自尊心の源泉として必要な幼児的自己愛を保つためには、人が生をうけた特定の社会的座標の中で生きることの素晴らしさを子どもに保証するような愛によって、環境が幼児的な自己愛を支持しなければならぬ。また、欲求不満を起こさせるような環境の要請に対抗して勇敢に戦うといわれている幼児的自己愛は、ひいては強い自我の基礎となるが、それは豊かな感性的な満足と、その同じ環境から与えられる励ましによって

強化される必要がある。子どもがもっと成長してからのこの自己愛の放棄や、より成熟した自尊心への変化の過程では、より現実的になった子どもが、それ以前に学んだものを活用しながら、しかも、もっと社会的意味のある高度な感情を獲得する機会を経験することができるかどうかをきわめて重要な意味をもつことになるという。そして、みせかけや大人のだましで養われた幼児的な万能感とちがって、自我同一性の素地となる自尊心は、自分の心身を働かせる機能的なよろこびと実際の行為とが次第に一致することを保証するような、自我理想と、社会的役割とその習熟とにその基礎をおいているとみなしている。したがって、幼児的な万能感の一部に経験をを通して何らかの確認を与えるために、子どものしつけは、感性面の健康と、次第に増大する自己支配をどのようにに教えたらいのか、またその健康と自己支配の成果に具体的な社会的承認をどのようにして与えることができるのか、それらの方法を知らなくてはならないと強調する。つまり、彼は、従来の精神分析が見落してきた自己

愛の集団的、支持的な側面について光をあてたのである。

このエリクソンの見解は、「自我発達と歴史変動」の終りの部分、つまりその第三章「自我の強さと社会病理学」の中で述べられたものであるが、われわれはまず、一精神分析家がこのような副題を用いたことに注目しなければならぬ。なぜなら、そこには、個人の組織立った内省の試みに貢献してきた精神分析がより包括的な心理学理論へと拡大される方向が示唆されているからである。そして事実、彼はそこで引きつづいて、アメリカの黒人やアメリカ移民の二世、三世の特殊な問題、さらに第二次世界大戦が終って帰国したアメリカの退役軍人の多くが直面した困難について考察を試みながら、精神が社会的、歴史的变化の影響をいかに深く受けるかということを示明かにした。その背景には、ハーバード大学で知遇をえたマーガレット・ミード、グレゴリー・ベイトソン、ルース・ベネディクト、スカダー・メキールといった文化人類学者との出会いがあった。そのことが彼の

その後の研究の方向づけに重大な影響を及ぼしたことに
ついては、彼自身折にふれて述べている。たとえば、こ
の著述以前の一九三八年に、そのスカダー・メキールが
南ダコタのバイン・リッジ保留地に住むスー族インディ
アンの子どもたちの観察へとエリクソンを導いている。
また、一九三九年にエリクソンがカリフォルニアに移動
するとまもなく、カリフォルニア大学バークレー分校
で、当時のアメリカ人類学界の長老アルフレッド・クロ
ーバーのすすめで、クラマス河口に住むインディアン
別の集団であるユーロク族について現地調査を行って
いる。ちなみにスー族は戦闘的な、野牛を追う遊牧民族で
あり、ユーロク族は高い樹木や山々によって他の世界か
ら隔絶した谷間に住む定住型の漁民であった。これらの
研究によって彼は臨床的理論に新しい視点を手に入れた
にちがいない。また、エリクソン自身、一九三三年にウ
ィーンからアメリカのボストンに移住し、一九三九年に
カリフォルニアでアメリカ国籍をえた。そしてまもなく、
自分が帰化したばかりの国が自分の故国と戦うとい

う不運に遭遇したのであった。これらの経験も人の一生
を見はるかすまたとない機会を彼に提供したものと思わ
れる。このように考えてみると、われわれの人生が歴史
の中の一こまであり、われわれは自分たちの親や社会に
対して心理学的な適応をするばかりでなく、自分が生ま
れあわせた特定の時代に対して如何に心理学的適応をさ
せられているかということを明らかにすることが、今や
彼の主要な研究テーマとなったことは容易にうなずかれ
るのである。

さて、エリクソンは、地理、歴史、経済に関する事実
と呼ばれているものが子どもたちの発達において決定的
に重要であることを明らかにした。またある集団におけ
る子どものしつけは、その集団同一性を乳児の身体的経
験に伝達し、これらの経験を通して、さらに個人の自我
の形成に寄与するというメカニズムを仮定した。たとえ
ば、スー族の人々にとって、いつの時代に、どこに住
み、何を食べ、何を生業としているかということのすべ
てが一つになって、彼らの考え方、慣習、子どもたちに

対する態度に影響を及ぼすのである。そして、スー族の男の子にとって、歩いたり、走ったりする能力は特別の意味をもつようになる。獲物を追い、捕獲することが一生を通じて彼らの仕事だからである。そのことは、獲物を手に入れることに関連した恐れや不安が不可避的に、成長していく子どもの自我の形成に大きな影響を及ぼすということの意味する。したがって、一つの地域社会の慣習とか恐れといったものは、それらがその特定の社会や文化に対して、どのような意味をもつかという観点から考えられなければならず、ましてやそれらを単純に指摘したり、判断したりしてはならないといましめていゝる。また、子どもが成長する過程で経験する葛藤は、たいていの場合、価値ある多くのものを生じさせるので、避ける必要もないし、心配する必要もない場合が多いといっている。「乳児に対する、矛盾し、道理に合わない要求のいくつかは、単なる大人の悪意や無知のしるしではなく、歴史的慣習や社会的、経済的な目的によつてもたらされた結果である。」（「乳児期と幼児期初期の諸問

題」一九四〇年）とも述べている。コールズが「同一性の概念は本質的に過去、現在、未来に関する記述である」（『エリック・H・エリクソンの研究』一九八〇年）と指摘しているように、どのような人生にも、どのような「葛藤」にも、そしてどのような部族や国家にも、同一性というそれがよつていゝる過去と、行くべき未来があるのである。

また、エリクソンによつて次のような点が指摘されている。地域社会には、子どもの各発達段階で、各年齢の個人によつて代表されるさまざまな役割の階層的な秩序があつて、それと調和する一つの「人生設計」に向つて子どもを方向づけようとする働きかけがある。たとえば、社会は、家族や近隣、学校などにおけるさまざまな人々との接触を通して子どもにさまざまな役割への実験的な同一化の機会を提供する。子どもは次々に継起する暫定的な同一化を重ねながら、たとえばもっと年上の人のようにならうとか、もっと幼かつたときのように感じたいとかのさまざまな期待をごく幼いときからつくりあ

げようとする。それらの期待が、心理、社会的な「適合性」を保証する経験の中で一步一步現実のものとなるにつれて、一つの同一性の一部と化していくと考えられている。このように、同一性形成の過程においては、心理、社会的相互補完作用が大きな意味をもつことについては、先に「同一性」の概念について述べたときすでに触れた。とくに、子どもの同一性は、その文化の中で意味のあることを成しとげることが誠意をもって、かつ終始一貫して認められることによって、はじめて真の強さを獲得することができる。と強調されている。つまり、

個人と社会の相互作用によって、或は相互確認の如何によって、同一性の強さが規定されるというのである。しかしこの点に関して、同一性の感覚が、ある役割に屈し、社会に無条件に順応することによって主に「達成される」という一部の人々のとらえ方に対して、エリクソンは、それは誤った解釈であり、社会との相互作用はあくまでも個人の自我の主體的機能によるものであると説明している。そして、集団同一性と自我同一性の相互的

な満たし合いが、より大きな共通の潜在的エネルギーを、自我の統合と社会組織の双方に提供することになると考えられている。

その例証としてエリクソンがあげたアメリカ・インディアンの話を紹介してみよう。一つはパバゴ族の場合である。その家の主人が三歳になる孫娘にドアを閉めるように命じたとき、まわりの大人は、幼い彼女が重いドアを閉めるのにやっと成功するまで、手を貸そうとはせず、謹厳に坐って、いつまでも待っていた。やっと閉めおわると、祖父はそこで重々しく彼女に謝意を述べたという。彼らの社会では、子どもに課される仕事は、その子どもにとって果たすことが可能なものでなければ要求されるはずはないと考えられていた。したがって、一旦、求められた以上は、彼女はあたかも一人前の女子であるかのように、それを果たす責任はすべて彼女だけのものであるとみなされていたのである。もう一つの話は、シャイアン族の男の子の場合である。男の子は走り廻ることができるようになると、彼の身丈にあった弓矢

を贈られる。そして、彼が動物や鳥の最初の獲物をとって帰ってくると、家族は、父親が獲ってきた野牛に対する場合と同じような厳肅さで、その獲物の寄進を受取り、それを正式に祝って食べるといふ。そして彼がついに野牛を倒したとき、それは彼が児童期の訓練の最終段階に到達したことを意味するのであって、児童期の経験と矛盾する新しい大人の役割を果たしたわけではない。つまり、成人してからの人生における役割と子ども時代のしつけが実によくかみ合っているのである。

アメリカ・インディアンは、すべての民族集団がそうであるように、自分たち独自の世界観をもっており、そして子どもたちを自分たちと同じように育てようとする。そのようなしつけが固有な慣習や儀式化した行動に発展する過程をエリクソンは描き出した。彼らのしつけについてきわだっていることは、子どもは幼い時から責任をもって社会生活に参加するようにたえず条件づけられていることであり、またそのために、子どもたちが学んだ技術や才能が何であれ、それらを試みる機会が家庭

や社会において徐々に周到に用意されていることである。たしかに未開の部族の生活においては、人々は生産源とその手段に直接的にかかわっている。彼らの使う道具は身体の延長である。彼らの呪術は身体に関する概念の投射である。子どもたちは集団の道具の操作や呪術の実践に参加する。危険に満ちてはいるが、身体と環境、児童期と文化はすべてが一つの世界である。エリクソンは、このようなスー族やユーロク族の社会の中に「成熟した人間生活の完全な形態」と、われわれが羨望すら感じる「等質性と簡素な統合性」さえ見いだしている。しかしエリクソンは同時に、これらの部族が現在直面している新しい問題を見逃すことはなかった。スー族は白人に征服され、残酷にもブラック・ヒルズの土地や生活の手段を奪われて、世間からの隠遁生活を余儀なくされた人々である。しかし、このように部族存亡の危機に瀕した彼らではあったが、連邦政府の教育家たちの強制する定住型の生活設計を受入れようとはしなかった。そのような彼らをエリクソンは殆ど「未来」のない民族であっ

たが、しかしきわめてはっきりした一貫性のある過去をもった民族であるにとらえている。すなわち、彼らの集団同一性は彼らにとって強力な心理的現実として生きつづけ、彼らは、今日なお、過去に抱いた希望と約束とをもち続けているのである。たとえ、世界中の人々が彼らを裏切ったとしても、スー族は「遠心的」な彼らの同一性の感覚と統合の観念に支えられて、ブラック・ヒルズと失われた野牛を取りもどす日まで闘いつづけるであろうという。

われわれはここで、文化的一貫性という経験が同一性の形成に如何に重要であるかを明らかにしたエリクソンが、同時に、アメリカや西欧社会にみられる同一性の強化を遅らせる文化的障害についても鋭い観察の目を向けていることに注目しなければならない。すなわち、アメリカや西欧社会では、未開の部族とは対象的に、道具や機械が身体の延長にとどまらなくなってしまった現実がある。いや、むしろ、すべての人間的な組織が逆に機械の延長になろうとさえしている。子どもは産業社会に対

して労働力として何一つ寄与するわけではない。たとえしたとしても、子どもの仕事は、子ども自身の力量や技能に対して評価されるのではなくて、能率化された産業界の要求に基づいて評価される。子どもの家庭での仕事にしても、親の気分本位で認められたり、ほめられたりする。したがって子どもは自分が達成した結果を評価する基準など学ぶことはないのである。

文明の拡大傾向とその階層化と専門化とが進むにつれて、児童期は、一生の一つの切り離された区分となり、その区分固有の伝説や文学をもつようになった。その結果、子どもは自我の統合において、彼らの存在に関連する社会の区分以外を包含することがきわめて困難となった。この指摘は、文明が子どもに強いる一貫性のなさに対する彼ならではの批判である。(エリクソンの子ども観については、回を改めて、「子ども」という観念の歴史の中に位置づけて考察してみたいと思っている。)また子どもたちには、たしかに、現実の、或は物語の中の人物や、習慣、特徴、職業、考え方などに多少とも実験的

に自分を同一化させることができる多くの機会がある。しかし、子どもたちが生きているこの現代という歴史的な時代は、断片的な各同一化の有効な統合を可能にするような社会的に有意義なモデルについてはごく限られた数しか提供してくれない。そこで個性豊かな多くの子どもたちは、同一化の対象を、不安定で部分的でしかも互いに矛盾しあうさまざまなモデルにしか求めるほかないというような立場に追いこまれている。神経症の子どもを示す症状で、異常に激しいむきだしの本能の爆発のように見えるものも、実はその子なりの自我の統合の努力である場合があるという。エリクソンは、このように、社会の不連続性や、子どもの中のしつけと社会の現実とのずれなどと、現代の神経症との関連性をも重要視している。そして子どもたちの生活の全領域に起っている急速な変化の統合を子どもたちに約束するような発達途上の自我同一性をわれわれが守ってやるのが急務であり、また、幼い患者に対しては、基本的な自我同一性の形成を成功させるための必要条件である信頼感の確立にまず

手を貸すような治療法が不可欠であろうと述べている。さらに、変動する歴史的諸条件から力を得ることができるとする自我同一性をつくりあげる教育には、大人が意味のある連続性の新しい基盤を子どもたちに与える努力と共に、歴史上異質なものの意識的な受容も必要であろうと提言している。アメリカの中流階級の親たちは「厳密な信頼性」や「機械的正確さ」にとりわけ高い価値をおいて、そのような「徳目」を子どもたちが生まれるとまもなく教えようとする。彼らの中には、それらの徳目が、無選択的な移民や暴力などによって脅かされていると感じているものもある。そのような傾向に対して、エリクソンは、国家としてそのような徳目を強調しない方がよいという。なぜなら、それぞれの集団は独自の価値観や育児法を維持しながらも、次から次へと確実に、アメリカ人にとけ込んでいくからである。むしろ、求めるべきものは、多くの地域に住み、多くの先祖をもち、多くの集団に属する人々が、全く同じように振舞ったり、全く同じように子どもを扱ったりしなくとも、お

互いがしっかりと共通の基盤に立っていると感じるような「より包括的な同一性」であろうと説いている。

以上のように、エリクソンは、さまざまな異った文化の中に、根本的に違ったものをみようとしたのではなく、すべての親や教師たちが子どもの発達を助けなけれ

ばならない、文化を越えた共通の課題があることを、同一性形成の概念化を通してわれわれに提示したのである。

(津田塾大学)

